

瀬沼茂樹

日本文壇史

24

明治人漱石の死

講談社

日本文壇史 XXIV



明治人漱石の死

昭和五十三年五月二十日 第一刷発行

定価 二〇〇〇円

著者 瀬沼茂樹

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一―二
電話東京(〇三)九四五―二三(大代表)／振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Shigeki Senuma 1978. Printed in Japan

目次

第一章

月刊『平民新聞』廃刊——平民講演会——仏蘭西文学研究会と神
近市子——第二次『近代思想』再刊と廃刊——宮島資夫——八木
麗子と結婚——処女長篇『坑夫』出版——堺利彦、大杉栄の批評
——尾竹紅吉と『番紅花』——富本憲吉と結婚——神近市子と大
杉栄——青山菊栄と山川均——伊藤野枝と大杉栄——日蔭茶屋の
事件

三

第二章

岩野泡鳴の別居問題——泡鳴と清子との関係——ブルターク『英

元

第三章

雄伝』の翻訳——蒲原英枝との関係——清子の立場から三角関係の処理——四面楚歌——学位請求の行方——新潟の蒲原一族の影響——清子と泡鳴との訴訟合戦——法廷闘争——離婚

三

情話の流行——『舞鶴心中』と『お艶殺し』——『情話新集』——赤木柝平の秋江評——柝平の『鈴木三重吉論』——『夏目漱石論』——『遊蕩文学』の撲滅論争

第四章

永井荷風の再婚——本巴家の八重次こと金子ヤイの家出——離婚——本巴家の再開——築地に転居——釈場通い——追懷文学『すみだ川』の一篇本——東京散策記『日和下駄』——八重次との復

四

交——代地河岸の二階家——荷風、三田を去る——雑誌『文明』

第五章

森鷗外の退官——母峰子の死——退官紀念品と謝状——論功行賞——武鑑の蒐集——『経籍訪古志』——渋江抽斎の探求——渋江保と邂逅——『渋江抽斎』連載——上田敏、家族を芝白金三光町に移す——上田敏逝去

101

第六章

島崎藤村の帰国——パリからロンドンへ——日本郵船の熱田丸——正宗得三郎と神戸に上陸——帰国の報道——芝二本榎の留守宅——青野季吉の報道——元の木阿弥——広助一家の根津宮永町移転——田山花袋、叔父横田良太の日記を読む——『時は過ぎゆ

113

く——その広告文

第七章

芥川・久米、漱石山房訪問——第四次『新思潮』創刊——芥川龍
之介の登壇——漱石の激励と推輓——芥川の結婚——久米正雄の
活躍——菊池寛と上田敏——菊池寛の強気——「新思潮の三尊」

一四三

第八章

武者小路実篤の鶴沼滞留と小泉鉄——脚本『その妹』——文壇の
人氣——反戦と台湾原住民処刑への抗議——『或る青年の夢』——
我孫子移転——長与善郎の結婚——『彼等の運命』——『項羽と劉
邦』

一六八

第九章

一九

志賀直哉の結婚——武者小路実篤の従妹——父直温の反対と廃嫡
——赤城山の猪谷旅館——長女誕生と死——我孫子生活——次女
留女子誕生——里見淳の大阪屋形生活——山中まさへの愛——
『晚い初恋』——長女誕生と死——『善心悪心』——「素人間」

第十章

二三

有島武郎の妻病む——小説『宣言』——吹田順助の造士館転任
——足助素一の独立社——イボメ屋——戯曲『洪水の前』等——
慶応義塾の教職——生馬・信子の離婚事件——安子の死——安子
の遺書——父武の死——中条百合子の登場——百合子と久米正雄
——『貧しき人々の群』

第十一章

三三

夏目漱石の晩年——『道草』のころ——秋声の『或る娼妓の一代記』から『奔流』——近松秋江と谷崎潤一郎——第一次世界大戦と『点頭録』——潤一郎の『鬼の面』——『明暗』——良寛の書と漢詩——木曜会での「則天去私」観

第十二章

三三

夏目漱石、重態に陥る——その経過——逝去と解剖所見——報道と感想——導師釈宗演と葬儀（青山斎場）——雑司ヶ谷墓地——紀念号三種『新小説』『渋柿』『新思潮』——大山巖の死

あとがき

参考文献

索引

装幀 小松桂士朗

日本文壇史
——明治人漱石の死

第一章

1

月刊『平民新聞』廃刊——平民講演会——仏蘭西文学研究会と
神近市子——第二次『近代思想』再刊と廃刊——宮島資夫——
八木麗子と結婚——処女長篇『坑夫』出版——堺利彦、大杉栄
の批評——尾竹紅吉と『番紅花』——富本憲吉と結婚——神近
市子と大杉栄——青山菊栄と山川均——伊藤野枝と大杉栄——
日蔭茶屋の事件

月刊『平民新聞』は、大正四年三月十五日付の四頁ばかりの六号を最後に、廃刊を余儀なくされた。第二次大隈重信内閣の巧妙な弾圧政策、発売禁止による主義者達の糧道を絶つ政策に遭って、半年あまりで、あえなくひねりつぶされてしまった。

3 第 一 章
しかし大杉栄は手を拱こまねいて、じっとこれに甘じているわけにはいかなかった。もちろん、生計のためということもあった。それ以上に、自分を慕って集り、自分をとりまく新旧の活動家たちの信望にこたえるためにも、何かを考えなければならなかった。「築地の親爺」こと野沢重吉を初め吉

川守園、村木源次郎、渡辺政太郎らの明治からの社会主義者たちから、宮島資夫、麗子夫妻、荒川義英、山鹿泰治、相坂佑らの大正の青年たちまでが自分を中心に、大きく渦巻いていた。

まず初めは月二回ひらいていた平民講演会に力を入れることであった。平民講演会は、大正二年七月にはじめた「センデカリスム研究会」を改称して、大正四年一月ころから催していた。毎月一日と十五日との二日、弁護士山崎今朝弥の斡旋で借りた、日本橋新常盤町の堺井証券会社の二階でひらいていた。その後、官憲の干渉で、大久保百人町の大杉栄の自宅から小石川水道町の借家など、転々と会場を移してつづけた。

小石川水道町には太平洋画会の大下藤次郎の建てた水彩画研究所があり、二階建てで、相当に広い家であった。明治四十四年十月十日に藤次郎が亡くなってから長い間空家であった。藤次郎夫人は宮島資夫の姉であったので、これをうまく借りうけた。大杉栄らはここを本拠に、将来は平民倶楽部と称する規模にまで育てたい野望をいだいていた。まず宮島夫妻が移り住み、エスペランティストの山鹿泰治や相坂佑が同居した。平民講演会は広い会場を手に入れて、飛躍の好機であったが、なかなかそうはうまくいかなかった。哲学、科学から政治・経済・社会について原理的な談話に終始し、話がとかく低調に終り、親睦会的な気分が強かった。

六月になると、大杉栄は、毎日曜日、仏蘭西文学研究会をひらくことにした。初等科、中等科、

高等科に分け、日曜日の午前、午後、夜と三時間ずつ教授することに定め、高等科を除き、六ヵ月間で終了することにしてあった。会費は入会金一円、月額一円であった。初めのうちは誰も講習にくる気配がみえなかった。そのうち追々に講習生が集ってきた。神近市子が津田英学塾で同学の青山菊栄を誘って参加したのを初め、林俊衛、山田吉彦（きだみのる）らの姓名が見出され、二、三十名の学生があつまるようになった。テキストはメエテルリンクの感想やタルドの『社会の法則』その他をもちい、タイプにして、予め配布した。宮島夫妻や山鹿泰治、相坂佑らも、この機会にフランス語を習っておこうと思い、遅ればせながら参加した。

大杉栄は大久保百人町の家を畳んで、この家に引越すつもりであった。ところが、小石川水道町の家は義兄の周囲の人たちや地主や近隣の人たちが主義者の出入を嫌って、苦情を申込んだ。九月になると、またこの家をあげなければならなくなった。

大杉栄は近くの小石川区武島町二十四番地に格好の二階家を見つけて移ってきた。十月を期して、宮島夫妻と共に『近代思想』を復刊し、再度の突撃をこころみた。宮島夫妻は、この五月に一子をあげ、売文社の仕事その他の雑業に従っていた。次いで新聞紙法による供託金の関係から、東京市内から四里以上離れた調布町布田小島分百六十七に移って、小冊子『労働者』を発刊することにきめた。同時に『近代思想』の発行名義人をも引受け、供託金の低減をはかった。

かように、大杉栄は『平民新聞』の再刊を断念し、一步退いて、『近代思想』の復刊から出直した。伊藤野枝が『平民新聞』の廃刊の後、すぐに冷静に大杉栄にすすめていたことでもあった。かつて知識的自慰だと自嘲してやめたような文学・科学、哲学の根本から再起をはかれば、当局もまた苛酷な発売禁止をもって、自滅を待つ政策にも出られまいという打算があった。事実、『近代思想』復活号（第三巻第一号）は、十月七日付で発行され、発売禁止にもならなかった。そればかりでなく、少数版再版を出す始末で、幸先のよい出発をつげた。

第二次『近代思想』は第一次と同じ体裁で、四十頁で十銭であった。大杉栄は、労働運動に献身的に尽した野沢重吉が胃癌で生命を失ったのを惜んで、巻頭に『築地の親爺』を書いた。その他『労働運動とプラグマティズム』『二種の個人的自由』『所謂新軍国主義』『平民経済学』『復活号』（編輯後記）の五篇を独りで書いた。荒畑寒村は『事実と解釈』『日本労働運動史』、荒川義英は中村星湖の提起した文壇的話題『問題文藝論』、官島資夫は『職業病』、同麗子は『青鞥』に呼応して『避妊と墮落』、山川均は郷里から『茅原華山君の階級論』、渡辺政太郎は『禁止物の配布』をよせた。充実した内容のつもりであった。大杉栄の主張は第一次の延長線上に主体的に理念的に問題を展開していったが、荒畑寒村が方法論的に問題を現実化しているのを初め、全体として『平民新聞』をへてきただけの進化がみられた。

しかし無事にすんだのは最初の復活号だけであった。第二号（十一月号）は、大杉栄が『日本及日本人』や『第三帝国』が発売禁止になったのに抗議した巻頭の『秩序紊乱』、および山川均が産児制限論を取りあげた『女の抗議』が、皮肉にも、秩序紊乱に相当する不当な文章だとみられて、発売禁止になった。この発売禁止は復活号があたって氣勢をあげていた出鼻を挫いただけに、経済的打撃は甚しかった。内部に意見の対立が起るとともに、新しい工夫をしなければ、存立の危機にさえ瀕していた。そこで、一方で第三号（十二月号）の編輯をすすめながら、他方で大杉栄、荒畑寒村の編輯経営という形態の改革または改組をはかった。

十一月二十六日夜、大杉栄は、荒畑寒村と語って、新旧の同志を召集した。吉川世民（守圀）、川上真行、有吉三吉、百瀬晋、宮島資夫、同麗子、荒畑寒村、相坂侑、大杉栄、堀保子、荒川義英、山鹿泰治、吉川啓一郎の十三名が集った。この十三人が発起人となって、近代思想同人会を設け、専ら経済的基礎をかため、同志の結束をはかった。同人会は社の維持と拡張とを謀るための同志および同情者の組織であり、毎月一口金五十銭の会費を負担し、毎月一回集会を催すことにきめた。さらに事務の分担を定め、吉川（世）、川上が会計係、百瀬、荒畑が編輯係、吉川（世）、堀が広告係と定められた。

調布にあった宮島資夫は、資金不足から『労働者』を二号で潰し、市内に舞戻ることになった。